

「慶長以前那古野村古図」に登場する神社・仏閣・建造物 (2017年7月22日版)

北	1	天神		?	現在の天守閣の位置? 熱田台地の最北端?
	2	山神		?	現在の西の丸の最北端?
	3	宗形神社		?	2017年7月9日、宗像神社が世界遺産に登録され、にわかに話題になっていますが、古事記のアマテラスとスサノオの誓約(うけい)の際、アマテラスの息から生まれた田心姫神(タゴリヒメ)、湍津姫神(タギツヒメ)、市杵島姫神(イチキシマヒメ)の3人の女神を宗像三女神(むなかたさんじょしん)と呼び、宗像神社(宗形神社)は、全国各地で祀られています。●那古野村古図では、現在の西の丸の北端に「宗形神社」と描かれており、「今(江戸後期)、御深井弁天と称す」と付記されています。その古図に描かれた宗形神社は、築城の際、どこに遷され、現在どこにあるのか? (1)西区浄心に宗像神社がありますが、西区弁天通の案内板によると、「宗像神社は初代藩主義直が宗像から勧請し、下御深井(名城公園外堀際)に創建され、明治26年、現在地に遷座」とのこと。義直による勧請・創建だったら、築城前の古図に描かれないはずなので、別の神社である可能性もあるし、「義直による勧請」が誤りである可能性も (2)また、北区城北団地に城北神社(宗像神社)があり、2016年秋、他の神社に合祀されました。この城北神社が古図の宗形神社と同一であると仮定すると、城北神社の100m東に、田心姫神(タゴリヒメ)を主祭神とする深島神社が室町時代から鎮座しており、清須越の際、深島神社に合祀するのが自然ではないか? よって、古図の宗形神社は城北神社は別ではないか? ●ちなみに、那古野村古図には、宗形神社の祭神が「田湍姫」と付記されているのですが、田心姫君(タゴリヒメ)と湍津姫君(タギツヒメ)を混同されたような祭神様。おそらく、口述で「タギツヒメ」と称されていたものを「田湍姫」と付記されたか? また、厳密には、弁才天とは、イチキシマヒメを指すようです。
	4	興西寺		1605年	西区城西の興西寺の由緒によると、1410年、川内正徳が基目寺村に浄徳坊を建立したのが始まり。1511年、富田荘熊井田郷に移し、1583年、浄土真宗に改宗し浄蓮坊と改号。1605年、名護屋村御深井紅葉矢来の内に移転→上宿北鷹匠町に移転。1610年、大谷派に変わり興西寺に改号。1617年、藩主より深井丸の山号を賜る。●古図では、現在の西の丸に描かれていますが、各史料によると、「清須越前にあった寺院」には含まれていません。那古野村に移られたのが慶長10年でギリギリだから?あるいは、「興西寺」と改号したのが現在地に移った後だから?
	5	天王社	延喜11年	911年	当時は(亀尾)天王社と称し、神仏習合により別当として真言宗安養寺十二坊(首班を天王坊という)がありました。●天王社は牛頭天王(ござてんのう)を祀っていますが、牛頭天王は祇園精舎の守護神であり、神仏習合の神でした。●織田信秀が今川氏豊の柳丸を奪取した際、天王社の社殿が焼失しましたが、後に、信秀によって再興されたとのこと。●名古屋城築城にあたり、築城奉行:佐久間政実がクジを引くと、天王社は不遷との神慮が出て、そのままの位置に鎮座。●明治に入り、神仏分離政策により、牛頭天王=スサノオと同一視され、江戸期までの天王社は、主祭神をスサノオに変更し、亀尾天王社は須佐之男神社と改称、別当を廃して神職を置かれたようです。*同時期、京都:祇園社→八坂神社、津島天王社→津島神社。●明治9年10月、名古屋鎮台創置にあたり現在地に遷座。明治32年、那古野神社と改称。
	6	八王子社		若宮八幡と同じ?	八王子とは、「牛頭天王に8人の王子がいた」とのことで、天王社と八王子社のつながりが深い。明治以降、神仏分離で牛頭天王=スサノオとされた後は、古事記の「アマテラスとスサノオの誓約(うけい)の際、それぞれの息から8人の神が生まれた」という記述から、引き続き、「八王子」は旧天王社とのつながりを維持。●那古野村古図によると、「八王子は杉村に」との付記があり、また、北区清水の八王子神社の由緒によると「若宮八幡の境内にあったが、清須越の際、現在地に遷座」とのこと。ただ、江戸時代の名所図会には、江戸期も、天王社の西に八王子が描かれています。●東京の八王子市も、戦国時代、北条氏が八王子権現を創建し、そこに八王子城を築城したことから、その地を八王子と呼ぶようになったとのこと。
	7	若宮八幡		697年~707年	社伝によると、文武天皇の時代に創建。文武天皇は、上甲の部(に)勝利した大武天皇の孫。上甲の部は、伊勢、尾張の豪族の協力によって勝利したと伝えられており、三重県・愛知県には、天武天皇関連の神社が多い。●「八幡様」は全国各地にあります。●「八幡様」は全国各地にありますが、応神天皇を神格化した八幡神(やはたのかみ、はちまんしん)が祀られています。また、応神天皇の皇子である仁徳天皇を「若宮」とし、「若宮八幡」は、応神天皇・仁徳天皇の両天皇が祀られています。
	8	誓願寺		1530年	西山浄土宗。現住職によりますと、享禄3年(1530年)、織田信秀による。熱田の正覚寺五世:日伝善朗の隠居先として。名古屋城築城に伴い、久屋(現在のオアシスの西)に移転。戦後、現在地(丸の内三丁目)に移転。
	9	安養寺		14世紀	名古屋博物館企画展「熱田と名古屋」の資料によると、享徳?(1453)年、真言宗大須宝生院の末寺に弥勒院、天王坊、南乃坊が那古野にあった。いずれも、真言宗の宥円(ゆうえん)が建立した安養寺と関係が深いとのこと。●名古屋博物館「古事記1300年大須観音展出品目録」の中に「権少僧都法眼宥円付属状:永徳3年(1383年)11月8日」とあり、宥円は、南北朝時代の僧? ●尾張名所図会「亀尾天王社」に安養寺も描写 ●西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベース「旧書名:弘法大師御遺告」の項で「安養寺は名古屋城三之丸にあった天王社の別当天王坊。明治5年に廃寺」とのこと。→*現在、中川区上脇町にある安養寺とは別の寺院です。
	10	磯貝邸			清洲藩主・松平忠吉が那古野村に鷹狩に来た際、立ち寄ったという記録があるようです。

南	11	萬松寺		1540年	天文9年(1540年)、織田信秀が建立。55000坪だった…とのことで、古図にあるように仮に正方形だとすると、一辺が約420メートル。古図によると、錦通のやや北。南北は、駿河街道を正面で待ち受ける形。桜天神を含む。東西は、旧小塚町の西。●徳川家康が幼少時、人質として萬松寺ですごした…とされる件について、萬松寺のHPによると、「熱田の加藤図書助順盛宅、さらに万松寺で3年間、信秀公の保護のもとで暮らす」とされています。これは、織田信秀が古渡城から末森城に移った際、那古野城から熱田までの距離が遠いため、萬松寺に移送したのではないかと推測しています。
	12	泥江神社		859年	現在の御園小学校の北側の袋町通を西に向かうと北側に泥江縣神社。古図には萬松寺のすぐ西に「泥江神社」と書かれ、「今、廣井八幡」との付記。萬松寺の建立にあたって遷座させられたか？と聞いていましたが、宮司様によると、もともと現在地だった…とのこと。また、社伝によると、当時は、八丁(900m弱)四方の神領だった…とのこと。氏子さんも現在の栄一丁目まで広範囲に及んでいます。
	13	富士浅間社		1398年	現在、東区の富士神社。●富士神社社伝によると、「応永9年(1398年)7月、郷土：前山源入大なる人が勧請」とのこと。また、教育委員会の案内板によると、「名古屋城築城の際、浅野幸長が社域に普請小屋を設けたため、幅下(西区浅間町)に遷され、その後、再び、この地に社殿を立てられた」とのこと。遷座先は、西区浅間町の富士浅間神社。ちなみに、西区浅間町の富士浅間神社の社伝によると、「1398年、三谷源大夫が勧請」とのこと。●現在の富士神社が再建された時期は？灯籠に「明治43年9月」の銘がありますが、再建されたのは、その時？ ●「浅間」とは火山を意味し、富士山の噴火の鎮静化を祈る先人たちが各地に浅間神社を建立。古事記によると、祭神の此花咲夜姫(コノハナサクヤヒメ)は、山を総括する大山祇神(オオヤマツミ)を父とし、火中出産したとの記述。●通常、神社の拝殿は南向きなのですが、富士浅間神社は東向き。つまり、富士山の方を向いて建立されています。中区大須、西区七間道の富士浅間神社も東向き。浅間町の浅間神社のみ南向き。古図では、かつては東向きだった？確認要。 ●浅野幸長の娘：春姫様が、尾張藩初代藩主：徳川義直の正室になりますが、名古屋城築城当時、春姫様は紀州でお留守番していたことでしょうか。築城当時、春姫に婚約の話があったのでしょうか？
	14	小袖懸けの松			名古屋中央大通連合発展会の案内板によると、(1)治承3年、平清盛により京を追われ井戸田に蟄居していた藤原師長に関するもので、師長が蟄居の後、放免され帰京の際、彼に馴れ仕えた娘に愛用の琵琶を贈った。娘は恋慕を押しさえきれず送別の帰途、古松に小袖をかけ入水した。(2)兵乱のため、この辺りの人々が四方に逃避し、乱が止んでそれぞれが地元に戻った。しかし、長者の娘は帰らず、両親は八方探し回った。娘の小袖が古松にかかっているのを見つけた。両親は悲嘆、小袖を埋め、塚を作った。
	15	名古屋山三郎邸			不明な部分が多いですが、名越流北条氏(今川那古野家)の末裔で、現在の名古屋で生まれ、妻は出雲阿国といわれ、妻とともに歌舞伎の祖とされています。当初は織田と縁戚の母と共に京の建仁寺にいましたが、15歳の時に蒲生氏郷に見出され小姓として仕え、秀吉の九州征伐、小田原征伐に参加したようです。氏郷が死去すると蒲生氏から離れ、京都で浪人した後、出家して大徳寺に入り、その後、還俗し、妹が嫁いでいる森忠政の家臣として仕えたとのこと。森忠政は山三郎を気に入り、5000石を与えたり、また、山三郎の妹2人が森家重臣と婚姻を結んだため、山三郎は森家中で大きな発言力を持ったようです。慶長8年(1603年)、森忠政は、山三郎に、同じ家臣の井戸宇右衛門を殺すよう命令、宇右衛門と山三郎は喧嘩の末、逆に宇右衛門に切られて死亡。享年28とも32とも。那古野村の古図に載っている山三郎邸は、実家ではないかと思えます。